

インド視察報告

グルガオン・アーメダバード



日本維新の会 神戸市会議員団

インド グルガオン・アーメダバード視察訪問 日本維新の会神戸市会議員団

参加議員 住本 かずのり
高橋 としえ
つじ やすひろ

2020年1月20日より25日まで、神戸市会日印友好議員連盟を中心とした議員団と神戸市内の企業団51名で、インドのグルガオン市、アーメダバード市に訪問した。主な目的は、神戸市とアーメダバード市の共同宣言書締結、神戸・アーメダバードビジネスミッションの参加、そして在印日本大使館や、JETRO、現地で活躍する神戸からの進出企業に訪問し、現地の経済状況やマーケット状況を調査した。また、川崎重工製の新幹線が開通する予定との事で、新ターミナルステーション建設現場を視察し、グジャラート州立大学との意見交換を行い、本市にある神戸大学との学術交流を約束した。

【インド視察日程表】

2020年1月20日(月)～1月25日(土)

- 1月21日(火) 9:00～ JETRO 視察訪問
11:00～ 日本大使館 視察訪問
14:00～ NRM(現地不動産総合事業) 視察訪問
15:30～ DLF 開発 サイバーシティ 現地視察
19:00～ インドデリー 兵庫県人会と意見交換会
- 1月22日(水) 9:00～ KOBELCO CONSTRUCTION EQUIPMENT
(コベルコ建機) 視察訪問
午後 アーメダバード市に移動
19:00～ 同行したビジネス訪問団と意見交換会
- 1月23日(木) 9:00～ アーメダバード高速鉄道駅予定建設現場視察
13:00～ AMA ビジネスミッション 視察訪問
14:00～ AMA ビジネスセミナー参加
18:00～ 神戸訪問団歓迎イベント出席
20:00～ アーメダバード市主催歓迎レセプション
- 1月24日(金) 9:00～ ガンジーアシュラム視察訪問
10:00～ 神戸・アーメダバード市経済連携に関する
覚書調印式締結式参加
11:00～ グジャラート大学視察訪問
12:00～ グジャラート大学学生によるランチミーティング

1月21日 9:00～

(JETRO)

JETRO ニューデリー事務所訪問 報告

【報告者 つじ やすひろ】

21日午前、まずはJETROを訪問した。JETRO インド総代表・事務局長 村橋靖之氏、海外投資アドバイザー 大穀宏氏が、ご対応くださり、インドの最新政治経済と日系企業動向について伺いました。それでは、要点を絞って報告する。

①インド市場の魅力とは？

なんといってもその市場規模と成長性にある。

現在、人口が中国に次いで第2位。15年後には、中国を抜いて1位と予想されている。しかも、中国ですら避けられない少子高齢化の影響を(その時点で)インドは迎えない、(人口構成が)若い、青年の国という点。

並行して、所得水準の向上も見込まれている点。現時点で、年収400万円レベルは約1.6億人であるが、15年後には約4億人になると予想されている。しかも、年収400万円以上は約1億人に(これだけでも日本を遥かに凌ぐ巨大市場！)。人口の半分を占める年収100万円レベルは約7億人である。また、消費の多様化が始まりつつあるという点も見逃せない。最近ではネットの普及により通信販売が盛んで、(ノートタッチノーペイ)から(タッチアンドペイ)に変化しつつあるとのこと。それでも、人口の8-9割にあたる約10億人がまだガラケーであるから、まさに始まったばかりである。

②日系企業による対印投資の現状は？

しかし、バラ色の投資環境が広がっている訳ではない。2018年10月時点で、インドへの進出日系企業数は、1441社。ASEANに比べて多いとは言えない数である。これは、インフラの未整備や、税務手続きの煩雑さ、各種規制、行政手続き(許認可等)の煩雑さ等の課題が多く、インドは難しい国というイメージがついているからという。現時点での進出企業の大部分が大企業である(中小企業の割合は15%)ことを考えても、早い時期に飛び込んでいくことで得られる果実が大きいと分かっているにしても、中小企業にとっては、まだまだ躊躇してしまう現実があるようだ。しかし、業種によっては、中小企業の進出が進んでいる自動車業界の例もある。10年前から現地で事業を始めたスズキは、今や日本での営業利益よりもインドの方が多(インド国内6割のシェア)そうだが、スズキの進出に合わせて関連する中小企業もやってきたという。

③インドの企業活動におけるリスクとメリットは？

最もネックとなるのは、盛んな労働争議とのことで、どこも労働問題については注意を払っているという。労務管理上、女性は問題が起きにくいそうで、そこに目をつけた日系企業が、女性だけで回しているところもあるそうだ。また、インド経済は、中国経済に重ね合わせてみられ

ることもあるが、実際は、虎(インド)とライオン(中国)のごとく似て非なるものという。カースト制度が根強いこと等色々あるが、最も大きな違いは、「イギリスの置き土産」と言われる公平な司法制度が確立されていることであり、判例があれば外国企業でも勝てるということ。この点は、大きな魅力でもあり外国企業の進出を促す助けになるに違いない。

そして、インド消費者の特徴として、価格に敏感で、とにかく安さを重視する傾向があるそうだ。良いもの価値あるものが欲しいのは誰もが共通の心理であるが、まだまだ収入に余裕がないことの表れだといえるだろう。

最後に、インド経済のエキスパート2人による説明と分析、豊富な情報は、まさに興味深くインドを知るうえで、貴重な機会・入口となった。海外でビジネスを考えられている方には、ぜひとも最初に(神戸そして当該国にある)JETROの積極活用をお勧めしたいと思う。



1月21日 11:00～

(日本大使館)

在インド日本国大使館訪問 報告

【報告者 つじ やすひろ】

21日午前、JETRO に引き続いて在インド日本国大使館を訪問した。次席公使 安藤氏、経済公使 宮本氏(ら全6名)がご対応くださり、最近のインド情勢(政治・経済)や日印関係、今後の見通しについてお伺いした。特に、躍動するインド巨大経済に、神戸の企業群(特に中小企業)が今後どう進出し、関わりを構築できるのか、大変興味深く活発な意見交換が行われた。

①進出企業の大部分が大企業

2018年10月時点で、インドへの進出日系企業数は、1441社。ASEAN に比べて多いとは言えない数である。これは、税制や規制等において課題が多く、インドは難しい国というイメージがついているからという。現時点での進出企業の大部分が大企業である(中小企業の割合は15%)ことを考えても、早い時期に飛び込んでいくことで得られる果実が大きいと分かっているとしても、中小企業にとっては、まだまだ躊躇してしまう現実があるようだ。

しかし、業種によっては、中小企業の進出が進んでいる自動車業界の例もある。10年前から現地で事業を始めたスズキは、今や日本での営業利益よりもインドの方が多(インド国内6割のシェア)そうだが、スズキの進出に合わせて関連する中小企業もやってきたという。

②中小企業がインドで成功するためには

しかし、こういった特殊な例を除き、中小企業が単独で、しかもインドで成功するためには、どうすべきか。それは、いかに信頼できるインド人(或いは)企業パートナーを見つけられるかが鍵という。そのための方法として、大使館では外国人技能実習生制度の利用を勧めている。インド人技能実習生を日本で採用し、(彼らがインドに帰国後)パートナーとして一緒にやっていくというものだ。インド人技能実習生は、2018年は20人のみだったが、2019年には400人に急増している。技能実習生に関心がある方(企業)がいれば、宮本氏が紹介できるそうだ。

③日本語教育は動き出したばかり

技能実習生を採用するにあたって欠かせないのは、日本語教育である。日本企業の中には、インドで研修センターを設けているところがあるが、極めて稀である。そもそも日本語教師が不足していて、初歩の初歩(入口)レベルの人材が教師をしているという。そこで、大使館では、インド政府と協力し、5年で日本語教師1000人育成を掲げている(現在2年目)。

④確保すべき人材層

インドといえば、トップクラスが欧米企業にスカウトされ注目されているが、日系企業は、(層の厚い)中間層こそ注目すべきであり、今後、いかにこの層を取り込んでいくかが重要という。また、インドの企業活動でネックとなるのは、労働争議とのことだが、労務管理上、女性は問題が起きにくいそうで、女性だけで回している日系企業もあるとのこと。インドの女性に対する差別は、他の国に比べて酷いそうだが、女性の社会進出を促すという意味でも目を向けていくべき貴重な人材層といえるだろう。



訪問の最後に、大使館中庭にて1960年12月1日に皇太子殿下・妃殿下(現 上皇陛下・上皇后陛下)が御植樹された菩提樹を前に記念撮影させていただいた。



60年の歳月を経た菩提樹のように、今回の我々訪問団がアーメダバード市との交流で、大きな幹と枝葉を伸ばしていけるよう思いつつ、次の視察先に向かった。

1月21日 14:00～

(NRM インターナショナル社)

NRM インターナショナル社訪問 報告

【報告者 つじ やすひろ】

21 日午後、デリーにて不動産事業を展開する NRM インターナショナル社を訪問した。統括部長(General Manager)である 大澤誠司氏が、ご対応くださり、インドにおける不動産事業等や日系企業動向について伺いました。豊富なインドでのビジネス経験を持つ大澤氏のお話は、大変興味深く活発な意見交換の場となった。

①NRM インターナショナル社について

日本に滞在していた英国・トルコの 2 名の青年が、2008 年にデリーで立ち上げた会社である。インドの不動産事業をベースにインド・日本・英国・トルコに拠点を持っている。従業員数は、183 名。インド(デリー)で手がける事業は、(主に)インド進出日系企業へのコンサルティング、不動産仲介・売買事業、インテリアデザイン内装工事事業、ビジネスセンター事業、書籍・インターネットによる情報発信事業である。わかりやすく言えば、お客は全て日系企業と日本人であり、進出相談からデリーでの会社の立ち上げ、生活拠点から会社・店舗物件の紹介、デリーの生活情報もお届けしますというあらゆる日系企業のニーズに応える会社である。

②インド市場を向くか、日系企業・日本人を向くか？

日系企業の存在感が最も強い産業は自動車関連であるが、10 年前からインド事業を始めたスズキは、徹底した現地市場に合わせる戦略(1 台あたり 60 万円)を選択し、今や、インド国内のシェア 6 割を占めるほどになった。一方、NRM 社は、インドに進出してきた日系企業・日本人にターゲットを絞り、必要とされるものは全て日本クオリティで提供するという対照的な戦略である。

③インドが複雑であればあるほど頼りにされる存在

特筆すべきは、インド法人設立の起業オフィスとして「ビジネスセンター」(全 25 部屋/1～70 名まで利用可能)を運営している点だ。いわゆるシェアオフィスだが、インドではカースト制もあり、チャイボーイ(茶の給仕人)や清掃人等を 1 事業所につき必ず雇用しなければならないそうだが、ここでは、ビジネスセンターが雇用しているので利用者に煩わしい負担はない点であったり、ビジネス展開に関するコンシェルジュサービスも受けられる点は、非常に魅力的である(入居企業は、NRM 社にとって、今後、より密接な顧客ともなる)。

最後に、NRM 社の内装・デザイン力について触れておきたい。「洗練されたお洒落なオフィス」(豊田通商)、「独創的で新しいデザインのオフィス」(電通)、「満足頂けるショールームへ」(TOTO)、「次の店舗も NRM に」(吉野家)等。日本人から見ても、非常に斬新で美しいデザインである。NRM 社には、8 名デザイナーを抱えているとのことだがいずれもインド人とのこと。

一般的な月収例として、運転手の月@3万円(家族4-5人が養える)が基準として語られるが、大澤氏に密かに確認したところデザイナーには月@8万円を支払っているそうだ。

それで、このクォリティ。ご興味のある方は、ぜひこちらを見て頂ければと思う。

<http://nrminteriorconstruction.com/jp/gallery.php>

日系企業・日本人に特化したビジネス展開だけでなく、インド人の発想力・デザイン力にも可能性を感じた訪問であった。



1月21日 15:30～

(DLF サイバーシティ)

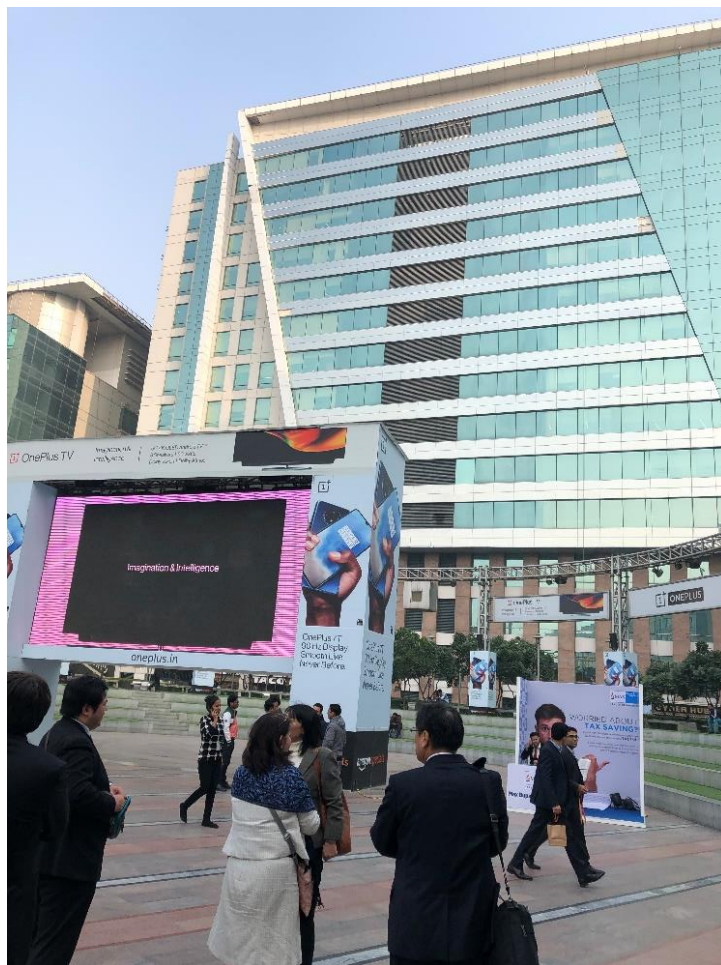
DLF サイバーシティエリア訪問 報告

【報告者 つじ やすひろ】

21 日午後、NRM インターナショナル社に次いで、DLF サイバーシティエリアを訪問・散策した。サイバーシティエリアとは、インドの中でも洗練されたオフィス街であり、Google、Oracle、Yahoo、LinkedIn 等インドに進出する多くの IT 企業や金融業がここにオフィスを構えている。開発したのは、インド最大の不動産デベロッパー「DLF」で、主要な地区をメロで結び、郊外に急ピッチで高層コンドミニウムを現在進行形で建設中である。このエリアだけ一転して「近未来」の雰囲気が漂う、まさに、インドの経済成長を肌で感じられるエリアである。

サイバーシティに隣接して、サイバーハブという各国レストランやパブ、Starbucks、McDonald、ピザハット、24seven(セブンイレブンからノウハウを学んだインドのコンビニ。現在 40 数店舗)、ユニクロといった日本でも見られる店が並んでいる。ここで働く日本人の間では「インドの六本木」と呼ばれているとのこと、日本と変わらない光景が広がっていた。近い将来のインドがここにある。ぜひ、その雰囲気を、写真を見て感じて頂きたい。





1月22日 9:15～11:00

KOBELCO CONSTRUCTION EQUIPMENT INDIA PVT. LTD

(コベルコ建機インド法人)

中川 浩二 Managing&CEO

【報告者 住本 かずのり】
高橋 としえ

神戸市を代表する企業の一つに神戸製鋼があるが、1月22日にその海外関連会社である KOBELCO CONSTRUCTION EQUIPMENT INDIA PVT. LTD(ノイダ市、中川浩二社長)を訪問した。この工場が所在するノイダ市は、現在インド政府が新しい国際空港建設を計画しており、空港計画地周辺の開発促進に向け高速道路産業開発局と産業開発公社が中心となって着実に周辺開発を進めており、いたるところで建築中の建物が見られ、日本に置き換えれば高度成長初期のような活気あふれる雰囲気であった。

中川社長は、2015年に一度インドに赴任しており2017年まで油圧ショベル事業の副社長であった。その後一度日本に戻り2018年8月に再赴任した。その時には、前年度に油圧ショベルとクレーンが別会社だったものを合併し統合会社になっており、その社長としてのインド再赴任だったとのことであった。

神戸製鋼はグループ会社200社を擁し、グループ全体で従業員3万人、グループ会社の半分が海外での活動を行っている。その中でもインド国内ではグループ会社6社が設立されている。コベルコ建機自体は神戸製鋼から1999年に分離独立した。

当該法人は神戸製鋼社の子会社であるコベルコ建機株式会社と伊藤忠商事の合弁会社で、2006年に設立された油圧ショベルなどの建設用建機を製造するメーカーである。コベルコ建機が97%を出資し、残りの3%を伊藤忠商事が出資という、コベルコ建機側の実質100%に近い出資となっている。取扱い重機は油圧ショベルとクレーンの2種類である。資本金160億円、全体で7400人の従業員がおり、世界的にネットワークを形成している。生産拠点は世界で5箇所あり、アメリカ(南カリフォルニア)、中国(杭州、成都)2箇所、タイ(ラーヨン)、インド(チェンナイ)である。

当日は KOBELCO CONSTRUCTION EQUIPMENT INDIA PVT. LTD(KCEI)中川社長自ら案内役をしていただいたが、その説明では現在インドでは、高い経済成長率を背景とし、インド政府のインフラ投資額が増加の一途をたどっており建機需要が激増している。それに伴い、当該法人では設立年度の2011年に、年/1200台の生産体制でスタートしたが、現在では年/2000台を生産しており、昨年8月には累計生産台数1万台の記録を達成したとのことであった。また、新たな新年度目標台数は年/3000台にまで生産拡大を計画している。当該法人の製造部品は日本から40%、インド40%、その他東南アジアが20%という構成である。40%もの現地パーツを使っているのは、原価レベルが20%安く調達できる点で、日本輸入部品は非常にコストが高く、現地パーツを使わないと他社との価格競争に勝てない。

KCEI現在の雇用は100人の契約社員を含む650人程度となっているが、現在の経営上の悩みは、インドでは労働争議が盛んに起きていて、組合はないのだが労働条件等は話し合

いで解決している。また毎年 10%近く賃金上昇が続いているとの事で企業運営上の難点となっている。このままいくと、10 年後には賃金は倍になるため、各社昇給率を抑えようとしているが、景気の悪かった昨年でも8%であった。離職率は低く採用は面接だけである。インドでは、労働者保護が未成熟であり、労働三権もない。そもそも労働法も整備されていない。またインド特有のカースト制度に起因する雇用問題もあるとの事であった。インド人は与えられた身分で与えられた仕事は全うするのだが、自ら考えて動くことはしない。そのため、マネジメントスタッフの採用が非常に難しい。そして、あまり高望みする人材は少ない。もう一つの経営上の悩みは、東南アジアにありがちな役人への賄賂等の法整備の不備もあり、日系進出企業はどの企業もコンプライアンス確立に苦慮しているとの事であった。

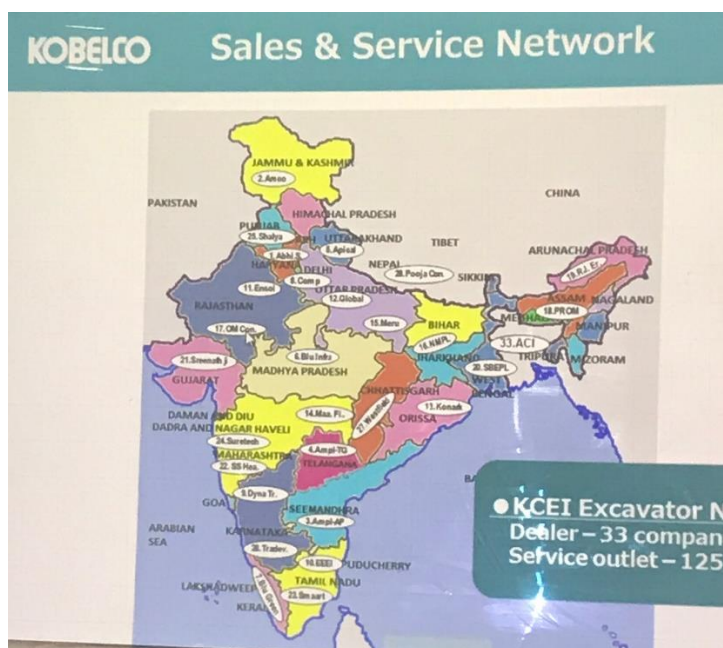
KCEI の年間の売り上げは油圧ショベルで年間 124 億ルピー(約 186 億円)、クレーンで 12 億ルピー(約 18 億円)、合計 136 億ルピー(約 204 億円)である。社員年収は平均 40 万ルピー(約 60 万円)、内訳はワーカー 24 万ルピー(36 万円)、新入社員で平均年収 22 万ルピー(約 33 万円)である。

当該法人の製造する油圧ショベルなどの建設用建機は、日本の厳しい排ガス規制をクリアしており、また低燃費で環境にやさしい高性能モデルであることから現地での評価も非常に高いものがあるとの事であった。中でも、燃費の点は非常に有利な点で客は 1 トン当たりのコスト単価比較で購入を決めるため、長期に使用できる本社製品は有利である。しかしながら、インド地方は非常に堅い岩盤のため、ほぼ 5 年で本社重機がスクラップになる。そのため、当社は改良を重ねて壊れにくい品質を高めた重機を製造しているが、その分価格も高い。短期間の使用現場は、重機コストの安い中国産、韓国産が使われている。インド国内の業界シェアランク 1 位は CAT(アメリカ)、2 位は小松製作所(日本)、3 位は日立建機(日本)、4 位はボルボ(スウェーデン)、5 位を三一(中国)と本社(KCEI)が争っている状況である。中国の重機は品質が良くなく価格が安くてインド国内ではうけているのだが、部品の多くは日本製が使われており、なぜそんなに安く製造できているのかが不思議であるとのことであった。

KCEI のような重機はインド国内では主に道路建設に需要が左右され、全 16000km 建設予定のうち、60~70%しか実施されていない。なお、海外からの中古重機は関税が 30%かかり新車と価格は変わらない。そのため、国内新車は国内中古として流通している。売れ筋はインフラ整備の 20t クラスがメインで売れており、都市開発などの先進国ではコンパクトな 10~15t クラスが売れ筋である。支払い状況では、個人客はほとんど代金を払ってもらえないが、法人では金融システムがしっかりしており、ファイナンスが組まれれば焦げ付きは殆どない。しかし、昨年来ノンバンクの破綻が景気悪化を招いており売り上げが落ちている。インド国内のチェンナイに製造拠点を作った理由としては、日系企業 25 社が集積している工業団地が近くにある点、土地が安い点、港が近くにあり輸出入し易い点、などである。

経済成長著しいアジアの中でも、その筆頭がインドであることから、生き残りを模索し、数多くの日本企業がすでに進出し、またこれから進出しようと計画している企業多数あるが、第一線

の駐在員は現地での諸問題を何とか解決すべく日夜奮闘され、その中で成果を挙げられていることに頭が下がる思いであった。



1月23日 10:15～

グジャラート州アーメダバード市高速鉄道ターミナル駅建設現場視察

ENGINEERS INDIA LIMITED

【報告者 住本 かずのり】

ALOK SINGHAL チーフ ジェネラル マネージャー

グジャラート州アーメダバード市の初日は、高速鉄道ターミナルステーションの建設現場を視察した。ここに、日本製の新幹線(川崎重工製)が開通する予定である。以下に現場責任者の説明を記載する。

当社は、鉄道建設、高速道路などのインフラ整備から石油、肥料プラント、金属製造、パイプライン整備、衛星打ち上げファンドなどの様々なコンサルタント会社である。この高速鉄道は、ムンバイ・アーメダバード間505キロを所要時間約2時間で結び、駅数を12駅設置する計画である。そして、アーメダバードのこの駅は起点となるターミナルハブ駅である。A、Bの2棟からなる建物群で、総延床面積は125000㎡、A棟9階建て高さ43m、B棟7階建て高さ35m、地下1～2階は駐車場で1500台収容できる。3階が歩道橋でつながっており、4階以上はホテルである。そして、敷地総面積は133000㎡。

ここに、新幹線、地下鉄、既存鉄道、バスステーションなど交通インフラが全てつながる。予算総額33億ルピー(約50億円)、現在16%建設が進んでいる。施工期間は30か月で完成は、語呂が良いように2022. 2. 22を予定しているが、現在40日工期が遅れている。高速鉄道とは、日本の新幹線のことであるが車両製造元の川崎重工とは契約が様々な理由でまだ締結されていない。駅名は「サバルマティ新幹線駅」でムンバイからの終着駅である。鉄道としての開通は2023年に一部開通予定である。

現場では、1日延べ600名の作業員が働いており、敷地は元運動場、陸上トラック、クリケット場が鉄道会社所有していたものを現高速鉄道会社を買収したとのことだった。

現場を訪れた感想としては、この場所に本当にパースに描かれたようなビル群のターミナルハブステーションができるのだろうかという感じだった。現場は2階までの鉄骨枠組みが組まれている状態で、こちらでは、足場というものが現時点では組まれておらず、現場作業員は2階の高さで足場なしで作業していた。さすがに、私達が現場に入るときには安全に対するレクチャーを受けたのだが、必ずしも現場作業員の安全確保が徹底されているとは思えなかった。国民性なのか、私たちが現場説明を受ける時でも作業員が親しげに近づいて写真などのリクエストに応えるなどで作業効率もあまりよく無い感じがした。

現時点でも40日工期が遅れているとの事だが、さらに遅れるのは必至ではないかと感じた。しかし、ムンバイからの高速鉄道が開通すれば、人やモノなどの交流が活性化し、川重製新幹線が採用されれば日本製の世界一安全な高速鉄道がインド国内でもPRされるであろう。高速鉄道事業は中国企業も虎視眈々と参入を狙っており、今回の神戸市とアーメダバード市との経済連携に関する覚書は本事業に関して大きな前進となるだろう。



1月23日 14:00～17:30

アーメダバード経営者協会 (Ahmedabad Management Association)

神戸アーメダバードビジネスミッション

アーメダバード経営者協会主催ビジネスセミナー

【報告者 住本 かずのり】

現地企業を中心とした経済関係者の関係者が集まるビジネスセミナーで、神戸の産業と投資環境についてプレゼンを行った。

AMA と言われているこのアーメダバード経営者協会の建物は日本の ODA によって建てられたものであり、2階には日本情報センターがあり、タッチパネルで日本各地の観光情報が表示されるようになっている。また、約 1000 冊もの日本の本が置いてあり、日本文化情報発信に一役買っている場所である。

経済セミナーでは、久元神戸市長を始め、在ムンバイ日本国総領事原田氏、日本系企業、JETRO、グジャラート州の産業紹介、そしてアーメダバード市パテル市長から挨拶があった。

神戸市：久元市長 神戸市の紹介(以下、スピーチ内容)

神戸とインドとの関係は、100年以上の歴史があるインディアン倶楽部があり、1000人以上のインド人が住んでおり、そして西日本最大のインドのお祭りインディアンメーラーを毎年開催している。昨年で10回目を迎えた。

2016年11月にモディ首相が来神され、兵庫県とグジャラート州が覚書を取り交わし、その後2019年6月にモディ首相が神戸を訪れ、アーメダバード市との経済交流の意思確認書を交わした。そして昨年12月にパテル・アーメダバード市長に神戸に訪問いただき今回の連携の訪問に繋がった。

神戸はスタートアップに力を入れている。2016年より世界で最もアクティブなシード投資家が集まる500スタートアップとパートナー結び、500スタートアップアクセラレーターで起業家養成に力を入れている。500神戸アクセラレータープログラムはシリコンバレー発のベンチャーキャピタル500スタートアップと神戸市が連携しての起業家支援プログラムで、2018年には237社の応募があったが、半数が海外からの応募であり、もちろんインドからの応募もあった。そのうち、56社が起業し、77億円の資金調達に成功している。

アーバンイノベーション神戸は、神戸市の行政が抱える課題をスタートアップと神戸市が一緒に解決する。このプログラムでのスタートアップのノウハウを取り込みつつ、諸課題を解決する。参加企業は神戸市で自社のサービスと商品を実験することができる。行政の抱える、3/4が解決され、14社のスタートアップを支援することができた。

また、神戸は医療産業都市を推進しています。我が国の最大のバイオメディカルクラスターとして成長している。1998年にスタートし、現在11000人が働いており、約370社の企業・研究所が集積している。日本最大のクラスターであり、ノーベル生理医学賞を受賞した、本庶 佑先生にリードして頂いている。

神戸医療産業都市は、バイオ、メディカル、シュミレーションクラスターと3つのエリアからなり、それぞれのクラスターがお互いに機能することで、イノベーション機能を果たすことを期待している。そして、研究、医療関連機関が集中し、非常にコンパクトシティになっている。

最後に紹介するのが、エネルギー分野での水素スマートシティ構想で、2つのことがある。1つは、世界で初めての市街地での水素で100%エネルギーを供給する実証実験である。2つめは、オーストラリアの未利用エネルギーの褐炭から液化水素を製造し、神戸空港島まで運搬、貯蔵、利用までを一体して行う実証実験である。先日、世界初の水素運搬船の進水式が川崎造船所で行われた。

マルチスズキ：豊福氏

先ほど神戸市長とお話する機会があり、神戸市とアーメダバード市とでビジネスを支援していきたいという話があった。両市のビジネスをプロモートしていければと思っている。

自己紹介をすれば、14年間インドで仕事をしており、最初はニューデリーの大使館からJETROに移り、そのうち3年間はアーメダバードに駐在している。アーメダバードに来た当初は、日本人現地駐在員は5人だったが、現在300人以上の日本人が仕事をし生活している。そして昨年より、マルチスズキで仕事をしている。そしてこれまで、300社以上の日本企業にアドバイスをしている。インドでビジネスをしていく上で、何が重要なのか問題点は何なのかをこれまでの経験を踏まえ話をしたい。大きく3つの重要な点がある。

1つの重要な点は、インドはハードルが高いイメージがある。確かに苦戦している企業もある。海外進出企業は大企業が有利のように思っているが、実は日本の中小企業に大きなチャンスがある。1つの例として、2012年に来た時には1つも日本の中小企業の工場がなかったが、その時初めて、日本でしかビジネスをしたことがなかった中小企業が、アーメダバード市に世界初進出した会社の社長が豊田ミノルさんという方で、本日もこの会場に来てもらっている。豊田社長の豊田工機は、今まで、日本にしか生産拠点がなかったが、毎月2週間に1度はアーメダバードに訪問して設立準備やパートナー探しをした。現在は3つの工場があるほどになり、業績も良いと聞いており、中小企業が成功した例である。中小企業の方がインドでビジネスをするのには合っているのではないか。本日、日本から来ている中小企業の方もビジネスチャンスは十分にある。

2つめの点は、インドにあった製品、技術、求められているサービスが何かの見極めが重要である。インドの情報は日本にいても得られるが、それは限られたものであり、実態は知られていない。日本にいただけではどのようなサービスや製品が求められているのかを知ることができない。それと、ムンバイ、チェンナイ、デリーなどの大都市の情報しかない。それは、駐在員が大都市にしかいないためである。大都市人口は国全体の2～3割で3億人、7～9割は農村部に住んでおり10億人と圧倒的に農村部が多い。インドは5%経済成長率と低迷しているが、農村部はバイク、冷蔵庫、携帯電話を買ったりしており、劇的な変化がある。

3つ目は、インドは27州あり地理的に広く、州ごとに文化などが違う。そのため、どこの州、都市とパートナーを組むのかを考えないといけない。大都市は色々な企業が進出しており、競争も激しい。適切なパートナーというか右腕となるようなインド人スタッフを見つけることが必要で、皆さん苦勞している。アーメダバード市での共同経営スタッフを探した企業はうまくいっている例が多く、それだけ他の大都市に比べても信頼できるのではないかと。そして、アーメダバード市は外国企業を大切にしてくれる一番良い都市である。

それでは、どのようなパートナー探し活動をすればよいか。アーメダバードでまずはインドの方を2、3人探し日本語を教える。そして、半年くらい神戸のあなた方の企業で働いてもらい、日本企業文化等を理解してもらい、インドで頑張ってもらおう。それがベストな方法ではないか。

在ムンバイ日本国総領事：原田美智雄氏

日印神戸ビジネスミッションで来られた51名の方ようこそ。アーメダバード市の良さと課題を是非日本に持ち帰り、今後のビジネスの参考にさせていただきたい。モディ首相や安倍首相の友好関係もあり、環境は整いつつあるが、やはり企業家の皆様の努力こそ重要である。神戸・アーメダバードはこの度、経済連携のパートナーとなるとのことだが、この関係を深化するにはお互いの市長の理解と努力が必要となるであろう。今後はグジャラート、アーメダバードでのビジネスがうまくいくよう期待する。

フジシルバーテック：入江社長

本社は佐賀県武雄市で売り上げ20億、従業員100名の会社である。特殊コンクリートを作っている会社で、6年前にこちらのブリティッシュ社の社長から日本の入江さんの会社を見せて欲しいと見学に来た。そして、是非インドでやりたいので教えてくれないか、という事であった。観光がてらにインドに来たのだが、こちらでの会社を見たとき、手作業、人力の会社でありとても品質の高いコンクリートができるとは思えなかった。それならば、入江さんの会社が来てくれということになった。

50年前に設立された我が社も最盛期には売り上げ40億、従業員200名程いたのだが、経済成長も終わり、バブルも崩壊後は年々売り上げが低下し、このままでは会社がつぶれるのではないかという危機感があった。アーメダバード進出がビッグチャンスだと思い、インドには日本の1000倍の仕事量があることなど理由にして、1週間で社員に賛同をもらい進出し、我が社はここにある。初年度の利益は出なかったが、2年目からは4億ルピー、3年目には11億ルピー、今期も8%の伸びが期待できる。インド人との契約締結までは様々なディスカッションがあり、時間がかかった。しかし、一度合意すると彼らは決して裏切らない。そして日本人とインド人の気質は全く正反対のものである。インド人の問題点は何でもノープロブレムという事ですませてしまう事で、それがプロブレムである。我が社が今後大きくなる事が、インドが良くなることだと思っている。

JETRO(日本貿易振興機構)

神戸貿易センター所長：荒畑 稔氏

JETROは日本政府が輸出入を増やすため、つくった日本の貿易投資機構である。日本企業が海外に進出することをお手伝いしている。世界54か国に74の事務所を設置している。国内にも48の事務所を設けている。海外と日本の地方都市を直接橋渡しできるようになっている。また、海外からの投資もお手伝いしている。まず、現地事務所に連絡いただければ対応させていただく。インド国内にも5か所、もちろんアーメダバードにも事務所は設置している。神戸にも事務所があるので、アーメダバード事務所と連携して対応できるようになっている。もし連絡いただければ、専門家による日本の制度について説明している。例えば、日本の法人登記、ビザ取得などの専門的なものも英語で説明させていただいている。もう一つは、テナポラリーオフィスの提供で、営業日50日は無料で事務所を提供している。

兵庫県、神戸市からの自治体からの支援策などがあるので、協力して支援のお手伝いをしている。日本でのフォローアップもしているので、何か問題が生じれば対応している。ホームページには、投資の基礎情報、産業別、経済などの情報が無料でウェブサイトを確認することができる。新しいビジネスを持ち込むことは大歓迎なので、日本での投資をお願いしたい。

神戸市は医療産業都市として、医療産業・研究所が集積している。こういった所で共同で新しいビジネスをしていくのも良いのではないかと。是非、神戸にお越しください。まずはJETROアーメダバード事務所まで連絡下さい。

アーメダバード市：ビジュアル R.パテル市長

グジャラート州アーメダバード市は産業の年として、東のマンチェスターとも言われたこともあった。ガンジーも活躍していた街として有名でもある。

交通も発展しており、地下鉄、バス、新幹線も誘致しようとしている恵まれた立地でもあり、観光客も増えつつある発展した都市である。昨年、神戸市には訪問させていただき、美しい街で大変好きになった。皆様が滞在期間中快適に過ごせるように努めて参りたい。2016年にグジャラート州と兵庫県が協力関係を始めて、その発展として神戸市とアーメダバード市の関係が始まった。

モディ首相も応援して頂いているので、こちらからも積極的に働きかけたい。本日、意思確認書を交わし、明日は具体的な内容をお話する予定になっている。

終了後、ハイティーと言われるチャイを飲みながらのオープンスペースでの名刺交換会のようなものが約1時間開催された。

18時からは歓迎会がホールにて、インドと日本の音楽フュージョンが開催された。



神戸・アーメダバードビジネスミッションに参加した感想としては、神戸からのビジネス訪問団が、経済連携をした、アーメダバードでのビジネスチャンスはどう感じるか、またインドからの投資をどう呼び込むか大変有意義なビジネスセミナーであった。同行した、神戸の企業の方とも話をしたのだが、自分の企業では、まだこの地での長期投資は難しいと感じたとの感想を述べていた。やはり、社会インフラが未発達な部分が多く、直接関連する企業は短期的に利益を出さないと、政治的に不安定な国なので先の見通しがたたないとも述べていた。

また、現地法人の日本企業の方からは、請負契約をして仕事を完成させても、あらゆるクレームでなかなか支払ってくれないお国柄との評判も聞いた。やはり、神戸市などがしっかりと経済連携協定を結ぶことで、進出に躊躇している本市の企業の後押しをすればウィンウィンの関係が築くことができるのではないだろうか。





↓翌日の新聞にも掲載された。

JETRO looks to double Japanese companies in Gujarat in 5 years

Japanese garden to come up on riverfront

GUJARAT-JAPAN TIES AT A GLANCE

Total Japanese companies in India: **1,441**
 Japanese companies in Gujarat: **100+**
 Japanese investment committed to Gujarat: **\$3 BN**

JAPANESE INVESTMENTS

Shagapura	₹550cr
Sanand	₹2,300cr
Mandali estate	₹1,950cr
Others	₹12,200cr
Dahaj PCPIR	₹2,400cr

Total: ₹19,400 crore

POTENTIAL DESTINATIONS FOR JAPANESE INVESTMENTS

Sanand Industrial Estate-II, Khoraj

SLOWDOWN EFFECT: JAPANESE INVESTMENTS IN AUTO SECTOR IN LOW GEAR: According to top officials of Japan External Trade Organisation (JETRO), investment in the automobile sector has remained slack of late, due to the slowdown in the sector. Speaking to TOI, Yasuyuki Murahashi, chief director general of JETRO, New Delhi, said...

KEY PROJECTS

Mumbai-Ahmedabad

SECTORS WHERE INVESTMENTS EXPECTED

Automobiles

1月24日 9:00～

ガンジーアシュラム ガンジー生誕地を訪問

【報告者 高橋 としえ】

インド独立の父、マハトマ・ガンジー生誕の地であり、1915年から1930年まで生活をし独立運動の思想を育んだと言われるゆかりの地ガンジーアシュラムを訪問した。ガンジーは貧困の緩和、女性の権利拡大、宗教間・人種間の融和、不当なカースト制度の廃止等を提唱する全国的な運動を主導しながら、インド植民地支配から解放するために、非暴力・不服従の原則を貫き、独立運動を徹底的に実行した。そして1947年に、インドはイギリスからの独立を勝ち取りガンジーは、その目標を達成した。

ガンジーアシュラムには、彼の生涯や活動を紹介する資料館があり、実際に生活をしていた居室等も見学できた。アーメダバードの街とはうって変わった静けさが漂っており、ガンジーはここにひっそりと住んで、武力によらないインド独立運動を密かに計画していたようで、それを思うと感慨深いものがあった。このような偉大な指導者の生涯と信条に触れる事ができ、ガンジー生誕地の地を訪問できたことは大変短時間ではあったが、有意義な見学になった。



1月24日 10:00～

神戸市・アーメダバード市経済連携に関する覚書調印式締結
リバーフロントハウス訪問

【報告者 高橋 としえ】

次に、「グジャラート州アーメダバード市と神戸市の共同宣言」の署名調印式会場であるリバーフロントハウスに向かった。インド訪問の主たる目的であるこの地で両市長により共同宣言が交わされた。久元市長は、「アーメダバードとムンバイを結ぶ高速鉄道と、アーメダバードの地下鉄開発とスマートシティ構想を遂行している先駆的なアーメダバード市に非常に期待をしている。今後は、両市間でさらなる経済、学術、文化交流を進めていきたい。」と述べた。

一方、ピジヤル・パテルアーメダバード市長は、「久元市長他 51 名の訪問団を歓迎する。当市の最近の取り組みに関して地下鉄とバス、新幹線が出来るのを大いに楽しみにしている。神戸の将来性については十分に認識しており、特に医療産業の積極的な交流には多大な夢を感じている。この後、グジャラート大学を訪問との事だが、学びの交流は経済交流、発展にも寄与するものだと感じている。」と述べた。その後、当市の外郭団体であるリバーフロント開発機構によるプロモーションビデオを見た。また、当市のインドで初めてユネスコ世界遺産都市として認定された街並みの紹介や、現在市内で取り組みが進んでいる7つの巨大プロジェクトのうちの高速鉄道プロジェクトやサバルマティ ウォーターフロント開発プロジェクトの説明を受けた。このスマートシティ構想は、市民の生活格差を解消しようとする素晴らしい夢のある構想で、神戸市、兵庫県交流を通して相互利益が豊富になるように願わずにはいられなかった。





久元市長とパテル・アーメダバード市長との覚書調印式



現地の報道陣の多さに期待の高さを感じた。

1月24日 11:00～

グジャラート大学訪問

【報告者 高橋 としえ】

次にグジャラート大学を訪問した。グジャラート大学は 1949 年に設立されたインドグジャラート州最大の公立大学であり、14 学部から構成されている。

Pandya(ヒマンシェ、パンディア)副学長からはグジャラート大学の概要が説明され、その後、グジャラート大学と神戸大学理事で副学長の吉井昌彦先生との間で交流意思確認書が交換された。今後両大学の間で 学術交流及び自治体間の都市交流の深化が 期待される場所である。当日の会場には卒業生および在学生による ベンチャーの取り組みの発表ブースがあった。

35000 人以上の学生が スタートアップ事業に携わり、200 以上の企業との交流があるとの説明を受けた。若者達のエネルギーと発展著しいインドの活力を大いに感じる事ができた。





【インド視察所感】 高橋 としえ

今回インド議連のメンバーとして、久元市長並びに経済界の皆様と共にインドアーメダバード市を訪問した。2001年に起きたインド西部大地震の際、兵庫県民からの義援金をもとにグジャラート州では学校再建を目的としたスクールプロジェクトが実施され、それをきっかけとして兵庫県とグジャラート州の親交が深まった。

このたび神戸市とグジャラート州アーメダバード市との「経済協力等に関する意思確認書」が調印されるにあたりその場に同席させていただいた事は誠に光栄に感じた。ここに至るまでの安井俊彦インド議連視察団長、山下てんせい副委員長他の並々ならぬご尽力があったものと拝察し、深く敬意を表すところである。

今回の訪問ではジェットロ、在インド日本大使館、デリー日本人会、日系企業、グジャラート大学などを訪問させていただき、現地の目覚ましい経済発展を目のあたりにすると共に、海外で活躍する同胞の皆様のお姿に深く感動した次第である。

インドにおいても女性の社会進出は目覚ましく、女性の就業拡大や社会進出も著しいと感じることができ、徐々に男女間の所得格差の是正が進んでいる。一方でカースト制度などの古い慣習も残っているものの今後は徐々に刷新されていくとも感じた。それは現在のモディ政権がベティ バチャオ ベティ パダオ(ヒンドゥー語で『少女を救おう 少女を教育しよう』)という女子や乳幼児の保護と教育促進政策を掲げているからである。この政策は現在強力に推進され本プログラムは640カ所で実施され、また女性による起業については約1000万ルピー(日本円で約1600万円)まで公的融資より援助するスタンドアップ インディアが実施され、累計で約690億ルピー(約1100億円)の援助額を記録している。

また、今回、女性の社会進出の先頭に立ち、その象徴的な女性であるアーメダバード市のBijal Patel 市長とも固い握手をさせていただいた。久元市長は挨拶の中でアーメダバード市と神戸市の親交を深め、経済協力だけでなく人と人との交流をいっそう促進していくと所信を述べられた。現在のインドは人の波が溢れ、至るところで建物が建設され、著しい経済発展を遂げている活気あふれる状況であったが、その光景を体感でき実りある6日間の視察であった。最後に本視察にアテンドなどご尽力いただいた関係者の皆様に改めて深く感謝したい。

【インド視察所感】 住本 かずのり

今回初めてインド、グルガオン市とアーメダバード市に視察に訪れたのだが、訪問する前は
どう神戸市との関係性があり、今後どうつなげていくのかは漠然としたものでしかなかった。日
本の産業ではスズキ自動車が進出に成功していて、インド国内でかなりの車両が流通してい
ることは報道もされているので知っていたが、日本企業、特に神戸の企業がどの程度進出され
ているのかは、実際現地に行ってみて初めて分かったことも多々あった。

移動中にバス内から見る限りでは、街中でも人が多く、若者が溜まって談笑している姿が目
に付いた。また、道路インフラがまだ不十分で、バイク、オートリキシャ、自動車が多くむやみに
クラクションを鳴らしており騒がしいことこの上ないのには閉口した。近代的なショッピングセン
ターもあれば、スラムもある。路上にはゴミが散らばっているが、ゴミ箱がある。家の無い路上生
活者らしき人が、野良犬に餌をやっている。しかし、このような猥雑な人々の生活には力強ささ
え感じた。後にこれらのことの意味がわかるのだが、全ては、宗教とカースト制の名残からくるも
のだという事を現地駐在の日本企業の方から聞いて納得した。人口規模もやがて中国を抜き
世界2位になる。やがて購買力ベースでの GDP が米国を抜き世界2位になるとも言われている。
これだけの人々がしっかりと教育を受け、雇用先があり、生産率を向上させれば、決してそ
のことも夢ではないだろう。

しかし、道路、鉄道網などのインフラ整備や上下水道の衛生管理、教育環境の整備などは
やはり遅れていると感じた。そこに、日本企業がビジネスチャンスとして進出している理由だろ
う。神戸からも、シスメックスや KOBELCO 建機など進出しているし、今回も商機があれば検討
したいとのことで、神戸市の企業団も訪問していた。今回、神戸市とアーメダバード市は経済
連携の覚書に締結したので、神戸市内の進出希望企業が進出しやすい環境作りとしては大きく
前進した。神戸市もそうだが、日本も今後、人口減少は避けられず、内需は縮小する。神戸
市も外需に期待するには、インドのような民主国家の大国は絶好の国であろう。しかしながら、
法整備、労務管理、宗教、カースト、など成熟した国家になるにはやはり10年単位の時間が
必要である。道州制のため、知事の意向が変われば、建設中のものもストップしてしまう。やは
り、進出企業も長期投資より短期投資に向いていると感じた。

何よりも魅力的な事は若者人材の豊富さであろう。インドが IT 関連で進歩しているのは、力
をつけた若者は身分差別のない外国で勝負することに情熱を燃やしている。現に過去アメリカ
のシリコンバレーを訪問した時には、多くのインド人が日本人を抜いて大活躍していた。神戸
市もそこに着眼点をおき、人材の確保に努めていけば500スタートアップ施策などの前進につ
ながるのではないか。今後の関係性の発展に大いに期待したい。最後に今回訪問した、
JETRO、コベルコ建機、日本大使館、また、現地在住の兵庫県人会の皆さまに感謝したい。

【インド視察所感】 つじ やすひろ

このたび、海外視察に帯同させて頂く貴重な機会を得たことに、先ずは感謝の意を表したい。

躍動するインド巨大経済に、神戸の企業群(特に中小企業)が今後どう進出し、どう関わりを構築できるのか。10～15年後には、おそらく日本を抜くであろうインドとの関わりこそ、神戸経済活性化の一端となりうると期待をこめて参加させて頂いた。

インド市場の魅力は、なんといってもその市場規模と成長性にある。人口が中国に次いで第2位。15年後には、中国を抜いて1位と予想されている。しかも、中国ですら避けられない少子高齢化の影響を(その時点で)インドは迎えない、まさにこれからという点だ。並行して、所得水準の向上も見込まれる。現時点で、年収400万円レベルは約1,6億人であるが、15年後には約4億人になると予想されている。しかも、年収400万円以上は約1億人である(日本を遥かに凌ぐ巨大市場!)。しかし、バラ色の投資環境が広がっている訳ではない。2018年10月時点で、インドへの進出日系企業数は、1441社。ASEANに比べて多いとは言えない数である。これは、インフラの未整備や、税務手続きの煩雑さ、各種規制、行政手続き(許認可等)の煩雑さ等の課題が多く、インドは難しい国というイメージがついているからである。現時点での進出企業の大部分が大企業である(中小企業の割合は15%)ことを考えても、早い時期に飛び込んでいくことで得られる果実が大きいと分かっているとしても、中小企業にとっては、まだまだ躊躇してしまう現実があるようだ。

中小企業が、この課題を乗り越え、インドで成功するためには、どうすべきか。それは、いかに信頼できるインド人(或いは)企業パートナーを見つけられるかが鍵という。そのための方法として、大使館では外国人技能実習生制度の利用を勧めている。インド人技能実習生を日本で採用し、(彼らがインドに帰国後)パートナーとして一緒にやっていくというものだ。やはり、国が違って、人との繋がりこそが全ての基本であることに変わりはない。そういった意味でも、神戸市とアーメダバード市の関係は大切にしていきたい関係である。都市間の結びつきから、文化的・経済的な交流を通して、個人間にもより一層の信頼関係が出来ることを期待したい。

最後に、技能実習生を採用するにあたって欠かせないのは、日本語教育である。インドでは、そもそも日本語教師が不足していて、初歩の初歩(入口)レベルの人材が教師をしているという。そこで、大使館では、インド政府と協力し、5年で日本語教師1000人育成を掲げているそうだが、いっそのこと、神戸の民間が進出し、先ずは日本語と(日系企業の各リクエストに応じた)人材教育を行う学校を立ち上げ、日系企業向けに人材供給を行ってみては如何だろうか。インド人技能実習生は、今後ますます増える傾向にある。2018年は20人のみだったが、2019年には400人に急増している。求められるのは、より良質な人材である!

これは、ほんの一例だが、今回の視察で、インドに大いに可能性を感じた人も多いのではないか。神戸市とアーメダバード市の関係が、今後さらに進展し、経済交流が進んでいくことに期待したい。